



巻 頭 言

技 術 の 国 際 交 流

永 田 良*

明治になって欧米からわが国に新しい文化が堰をきって流れ込んできたとき、先進技術導入の有力な担い手は海軍であった。光学技術の分野では、軍艦に装備する測距儀がある。カメラの距離計と同じ原理の合致式測距儀は1888年に英国で発明されたが、わが国には1893年に、初めて輸入された軍艦「吉野」に装備された。1914年に国産第一号機が製作され、その後輸入を重ねて1937年には、戦艦「大和」用に大きさ、性能とも世界一の15m測距儀が完成した。測距儀は、高精度の望遠鏡であり、この技術は戦後のカメラ産業発展の基礎になったことは周知のとおりである。

このようにわが国の技術導入のパターンは、いくつかの輸入品の中から最適のものを選び、模倣、改善を重ねて独自のものに発展させていく、そして、特徴的なことは他国に比べてきわめて短い期間にこのプロセスが達成されることである。このパターンは鉄砲が1543年に伝来してから、わずか20年足らずで多量に生産されて実戦に使われたことなど、また、戦後の技術開発に多くの例を見ることができる。技術だけでなく芸術、宗教、思想、文学などの分野において、歴史的に日本人は他国からの文化導入がきわめて得意のようである。

しかし、逆に日本人は異文化との共存は不得意で、過去における他国文化の破壊者としての重荷が心に浮かび、心苦しい思いが先立つ。科学や技術は、世界の人々のために、世界の人々によって築かれるべきもので、人類共通の財産でなければならない。かかる見地から、われわれは他国の知識を取り込むばかりでなく、世界に向かって自ら得た知識を表明することに努力すべきである。わが国では、技術の国際交流が始まってから歴史は浅い。われわれの努力が国際的に認められるには、時間がかかるであろうが、作物に肥料を与えるのと同じで、将来必ず実は結ぶものと確信している。

技術の国際化が叫ばれる今日、世界と共存するために、他国に提供できるような優れた技術の開発が枢要である。このためには、大学、高専の教育の場においても、常に問題を発見し、問題を形成する能力を鍛え、創造的思考力の豊かな学生を育てることがいっそう大切である。これは教育者の日頃の姿勢と工夫によって可能だと考えている。